基礎的技能の一断面について

―― 音　楽 ――

岡　野　広　平

最も音楽性にひらきのある一年生を，私なりに求めている音楽的水準に到達させ楽しく自主的な学習を展開したいと思い，歌唱活動を中心に学習指導を展開してきた。ここで歌唱表現の中心にしたことは，階名でうたえる，階名で演奏できるといったことであり，その基礎として階音相互の関係を理解し正しく表現できる能力，即ち音程，リズムの正確な把握表現といったことを強調してきた。これが

1　どの程度に生徒にうけ入れられているか。
2　その結果からどんなことが推察できるか。
3　今後の問題としてどんな事項が存在するか

といったことについて知るため二回のテトスを試み，結果をまとめてみた。

●テストの実際とその結果について

（第一次）

・期　日　　11月中旬
・取材した旋律　十五夜（F2/4）祭（D2/4）
・要　領

ピアノの演奏をきいた後，次の楽譜の空白の小節に適当する正しい旋律をかきなさい。

・問　題

。でははじめます　（2回だけひく）　聞く
。かきなさい

この解答を小節毎に（このとりあげ方自体，音楽語い的な面から異論も生じると思うが）音程，リズムの両面に分類して誤答をしらべてみた，その結果は次頁の表のようである。

※A．B．C．D．Eの全部をまちがえたものは，全部誤答の項に入れ各項目の誤答数に加えてない　以下同じ

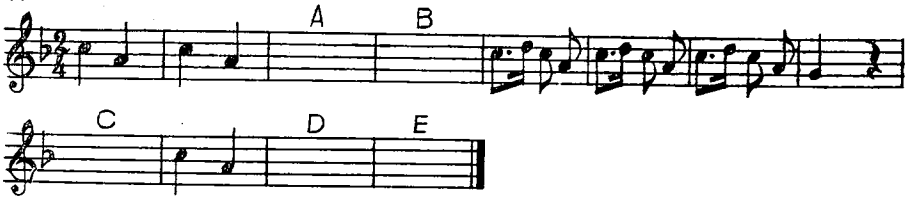
この短かい旋律の歌唱は音程リズム共に正確に表現され，暗唱で歌い親しまれていたものだけに基礎技能としての読譜，聴音．記譜力について幾多の素材を提示しているように思われる。今一応表に基いて誤謬の顕著な傾向について考察してみることにする。

No1．の音程について

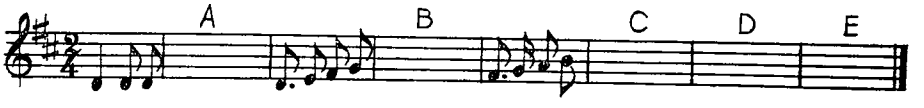
〔A．B〕　。5 3 ¦ 5 3 ¦をうけて2 1 ¦ 3 0 ‖と音階的にながれる

。無自覚的に歌唱していた為，語いとしてつかめておらず音高の記録が全くでたらめで

NO. 1



NO.2



No. 1

ヘ長調 2/4		A	B	C	D	E
		1 2	3 0	1 2 3 6	2 3	1 0
音程	男	4 (3.4)	3 (2.5)	17 (14.4)	15 (12.7)	5 (4.2)
	女	0 (0)	1 (1.2)	8 (10.0)	3 (3.7)	1 (1.2)
リズム	男	5 (4.2)	8 (6.8)	14 (11.8)	3 (2.5)	9 (7.6)
	女	3 (3.7)	10 (12.5)	11 (13.7)	2 (2.5)	6 (7.5)

全部正答 {男 11 (9.3) 女 19 (23.7)　　全部誤答 {男 30 (25.4) 女 11 (13.7)

No. 2

ニ長調 2/4		A	B	C	D	E
		1 1 1	3 2 1	5 4 3	i i i	i 0
音程	男	1 (0.8)	9 (7.6)	12 (10.1)	19 (16.1)	17 (14.4)
	女	0 (0)	3 (3.7)	5 (6.2)	14 (17.5)	13 (16.2)
リズム	男	10 (8.4)	29 (24.5)	29 (24.5)	19 (16.1)	29 (24.5)
	女	6 (7.5)	17 (21.2)	19 (23.7)	7 (8.7)	16 (20.0)

全部正答 {男 23 (19.4) 女 27 (33.7)　　全部誤答 {男 5 (4.2) 女 2 (2.5)

ある（どの項にも該当）

。ヘ長調における階音の相互関係の理解の不足から１２₁３０‖のつもりで２３₁４０‖とする。

。ハ長調の階名で記譜する　（どの項にも該当）

〔Ｃ〕。階音ファとラの区別がつかずドレミファとする者が圧倒的に多い，即ち１２３６₁５３‖を１２３４₁５　３‖とする。又ミ ラの４度音程をミソの３度と混同し１２３５₁５３‖とする者も前者に次いで多い。

。１２１６₁５３‖と６度の和音の響きを把握して記録した者も少しいたが４度と６度の音程把握の難易ともからんでおもしろく感じられた。

〔ＤＥ〕。１２３６₁５３‖のあとをうけて３２₁１０‖と音階的に下行進行をとる傾向のものが多い。

No1. のリズムについて，

〔A.B〕。♩♩₁♩ 𝄾‖ときながら♩♫又は♫♩と記譜している傾向が多い。これは観念的把握の結果ともみえるしまた単なる知的理解の事実への具現とも考えられる

〔Ｃ〕。♫♫をその前の♫♫のリズムの反復強調されたもと混同し♫♫とする者が多い，これは♫と♩.♩の等分と不等分リズムの混同型とみてよい

。♩♩♩♩と４拍子に記譜して拍子について全く無関心の姿もみられる。

〔D,E〕。♩♩₁♩ 𝄾‖を〔AB〕の時と同様に♩♫又は♫♩とする傾向が多く，中には♩♩₁♪ 𝄾‖とするものもある。

これらは全く拍子とリズムの結合力の不備より来るものとみてよい。

No.2,の音程について

〔Ａ〕。同度音程への抵抗を感じているものが少人数ながら見受けられる，即ち１１１を１５５と記譜している

〔Ｂ〕。３２１の下向順次進行を和音Ｔの感覚で把握するのはよいとして３３１又は３１１‖と経過音をのがした形で記譜しリズムで拍子を補っている

。４３２１とさきの1･２３４と分離せずにうけとって記譜している

〔Ｃ〕。５３‖又は５３３‖といったようにＴの和音感覚での記譜が多く，又５４２と階音の相関的位置の判断の誤りに基く記譜と見られるものもある。

〔DE〕。i i i₁i 0‖とハ長調での記譜が多

く，又，ホ長調の位置でかかれて2 2 2 1 2 0 ‖と読譜しなくてはならない傾向のものもある，これらは共に主音の位置に基づく階音相互の位置判断の誤謬である。

。オクターブ下に記譜する傾向がある。これは変声期障害のあらわれとも見えるが，正しいピッチの把握といった点に注意がむけられなばならない。

No.2 のリズムについて

〔A〕。第一拍を長いと意識しているが拍子に乗っていない為に♩♩♩とか♩♪♪といった記譜が多く中には♪♪♩と逆の形もある

〔B〕。Aのリズムの残像による影響か♩♫のリズム形をとるものもいたが一般に♫♫記譜するものが多かった。これは教材の記憶による再現であるがそれだけに鵜呑みにする傾向もうかがえ音を純粋にききとってそれをまとめる力といったことに注意を払わさねばならない，その他♫♩のリズムが目立つ

〔C〕。Bで犯した誤謬以外に♩♩♩や♩♩♩が目立つこれも拍子感からづれている。

〔D.E〕。♩♫ 1 ♩. 𝄾 ‖ ♩♩♩ 1 ♩. 𝄾 ‖ ♫♫ 1 ♩ 𝄾 ‖ としたものが多く，ここでも拍子にのったリズムの判断力に欠けている点が現れている。

。特異なものとして♩.♪ 1 ♫♩ ‖ といった形のものも見えたが，これについては語いを正しく把握せず「ドンドコドン」という歌詞の語感からくるものを知的にまた観念的に感覚の残像を追って作りあげたものと判断してよいのでないかと考える。

―― 第 2 次 ――

・期　日　　12月中旬

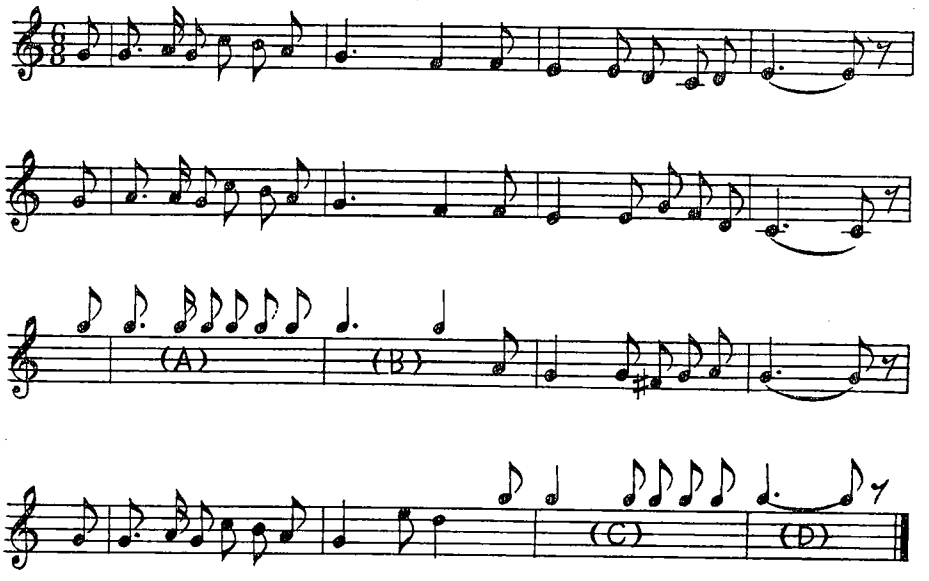
・取材した旋律　ローレライ（C6/8）
　　久しき昔（F4/4）

・要　領

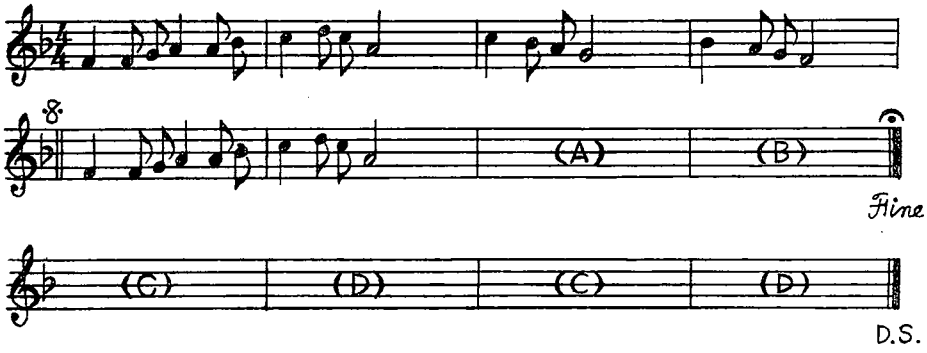
全く記憶テストの形式で，ピアノ音は与えず生徒の所有する読譜力と音感によって旋律記譜をさせる。

・問　題

NO. 1



NO.2



但し、ローレライは⅝拍子で小学校でも歌唱の回数は少なく，中学校では初めて学習したものであるのでリズム譜は与え音程のみを対称とした。

これを第一次の集計に準じてまとめたのが次表である。

No. 1

ハ長調 ⅝		A		B		C		D	
		3 ¦ 2 3 2 5 2 2		7 6		2 ¦ 1 1 7 6 7		1 1	
音程	男	20	(16.9)	21	(17.8)	13	(11.0)	11	(9.3)
	女	7	(8.7)	4	(5.0)	7	(8.7)	9	(11.2)

全部正答 {男 66 (55.9) 女 61 (76.2)　　全部誤答 {男 16 (13.5) 女 4 (5.0)

No. 2

へ長調 ⅘		A		B		C		D	
		5 4 3 2 3 2		1 0		5 4 3 2 5 5		4 3 2 1	
音程	男	8	(6.7)	11	(9.3)	11	(9.3)	5	(4.2)
	女	7	(8.7)	11	(13.7)	9	(11.2)	4	(5.0)
リズム	男	55	(46.6)	48	(40.6)	14	(11.8)	12	(10.1)
	女	39	(48.7)	22	(27.5)	6	(7.5)	3	(3.7)

全部正答 {男 8 (6.8) 女 17 (21.2)　　全部誤答 {男 38 (32.2) 女 12 (15.0)

さて誤りの傾向を拾ってみると次のようである。

No.1.について

〔A.B〕◦ 3 ¦ 2・3 2 5 2 2 ¦ 7・6 ‖ と５２の下方４度音程をオクターブ高く記譜し音感覚のずれに気付かない。

3 ¦ 2・3 2 7 2 7 ¦ 1 6 ‖ と音の把握のぼけた形で前後の音を混同して記譜している。

◦その他語い力の不足から次のように記譜しているものも少しいる。

3 ¦ 2・3 2 1 5 5 ‖ 3 ¦ 2・3 2 5 4 5 ‖

〔C．D〕◦ 2 ¦ 1 1 1 7 6 ¦ 7 1・ ‖ といった

ものを第一に　2 1 1 7 6 ₁ 7 • 1 0 ‖

2 2 1 1 7 ₁ 6 • 1 0 ‖ といった記譜が多く暗唱による語い力としかも拍子にのった意識的表現力に大きな問題を残している。

No.2について

〔ここでは語い的な見方で進んでみる〕

〔A.B〕　◦音程面では5 4 3 2 ー | 4 3 2 1 ー ‖ とaのフレーズをそのまま想起して記譜しているものが多くあとはリズムの誤謬が目立つ　これを分類すると

♩♫♩♫ ₁ ♩. 𝄾 ‖ に対して

(イ) { ♩♫♩ ₁ ♩.♪♩ ‖
♩♫♩ ₁ ♫♩ 𝄾 ‖ といった形と

(ロ) { ♩♫♩♫ ₁ ♩. 𝄾 ‖
♩.♬♩♫ ₁ ♩. 𝄾 ‖ といった形のものになる　(イ)は拍子感覚のずれに起因するし(ロ)は等分リズムと不等分リズムの混同によるとみなされる。

〔C.D〕　◦音程面では

5 4 3 2 5 5 ₁ 4 3 2 1 ー ‖ と音程を転回した形と，5 4 3 2 5 5 ₁ 3 3 2 1 ー ‖ 又は

5 4 3 2 5 5 ₁ 5 3 2 1 ー ‖ といった形のものが傾向として多い。前者は変声期の特色としてあらわれる音程転回を無意識の中に行い，これに気付かずにいるといったものと，概念的にソを位置づけるものとに分けられる。リズムについては

♩.♪♬♪♩ ₁ ♩♩♩♩ ‖

♩♬♩ ♫ ₁ ♩.♪♪♩ ‖

♬♪♬♪ ₁ ♫♫ ‖ といったものが傾向として見えるこれは階音の位置づけといった点に多く留意し旋律リズムを拍子に乗って感得し表現しようとする意識的判断の稀薄によるものと思われる，なお第一次の時と同様，階名唱によるものをすぐハ長調で記譜しようとする傾向がまだ相当にみえる。

●結果の総括と反省

以上　第一次第二次のテストに基いて誤謬としてあげられるものを総括してみると次項のようなことになるかと思われる。

1　階音相互の関係に対する意識的態度に欠ける

2　聞いたものを全体として捉えようとする態度に欠ける。

3　リズムと拍子の結合に対する意識的態度に欠ける。

4　階名唱の果す役割についての意識的態度に欠ける。

さてさきに取材した四つ旋律の中　前者はそれぞれ一時間，後者はそれぞれ二時間取扱い，階名唱にも通じ暗唱による歌唱表現にも何ら抵抗を感じられなかったかに観察していたのであるが，生徒個々にあたるとき如何に不適確にうけ入れられ，記憶の片隅にゆがんだ形でとじこめられていることか。ともあれ，一次二次の結果，約30%のものが常に不消化の状態で学習を継続していることが覗えたのである。私はここに平素の歌唱活動が，ともすれば視唱的聴唱といった安易な方向に流れようとする傾向に大きな反省を加え，読譜力，聴音力を中心とする基礎的技能の習得につとめ，より効果的な学習が展開されるよう方法的に努力する積りであるが，この基礎的技能を限られた週二時間の学習を通して如何に高めるかは今日の課題である。